# 基　調　報　告

愛知教職員組合連合会

これまでの７０次にわたる教育研究において、わたくしたちは夢と希望あふれる教育の創造をめざし、子どもたちを中心にすえ、それぞれの学校・地域の特色を生かした、自主的・主体的な教育研究活動を着実に積み重ねてきました。また、保護者への意識調査を実施し、今日的な教育課題を明らかにするとともに、各地域で教育対話集会などを行い、保護者や地域の方々と意見交換をする中で、子どもたちの「生きる力」を育む取り組みについての合意形成をはかってきました。そして、各学校では子どもたちの健やかな成長を願い、日々教育活動に取り組んできました。

さて、小学校、中学校ともに新学習指導要領が全面実施となりました。学校現場では、「特別の教科　道徳」「外国語教育」「プログラミング教育」などへの対応に加え、新型コロナウイルス感染症の拡大や一人１台の端末の整備等の対応にも追われています。学習内容や授業時数の増加により、子どもたちのゆとりが奪われるばかりか、子どもたち一人ひとりと向き合う時間を確保することも難しくなり、ゆきとどいた教育が十分に行えなくなることが危惧されます。子どもたちに必要な力は、自ら課題を見つけ、主体的に判断し、行動できる「生きる力」であり、それは、ゆとりとふれあいを保障する教育課程の中で育んでいくべきものであると考えます。

わたくしたちは、あくまでも学習指導要領を大綱的基準としてとらえ、未来を担うすべての子どもたちのために夢と希望あふれる教育を創造する取り組みを継続し、学校現場からの教育改革を推進していかなければなりません。そのためにも、基礎・基本の確実な定着はもちろんのこと、子どもたち一人ひとりが学ぶ意欲をもち、自らすすんで取り組む、より質の高い学びを大切にしていかなければなりません。また、人・自然・文化などとかかわり合い、地域に根ざした体験活動を中心にした学習を構築し、学校・家庭・地域の連携をよりいっそう強化し、協働して、地域ぐるみの教育を推しすすめていかなければなりません。

今次の教育研究活動においても、ゆとりとふれあいの中で「わかる授業・楽しい学校」の実現をめざし、「学びの質をより追究するとともに、子どもたち一人ひとりの意欲を大切にし、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動をすすめる」「学校・地域の特色を生かし、家庭や地域社会と協働をはかりながら、人・自然・文化などとのかかわりを大切にした創意あふれる教育課程編成活動をすすめる」の２点を研究推進の重点として提起しました。わたくしたちがすすめる教育改革は、日々の教育実践を積み重ね、その中で成長していく子どもたちの姿で示すべきであると考えます。各分科会においては、実践研究の報告をもとに、活発な議論を展開するとともに、その成果を各教組・分会に持ち帰り、還流をはかっていただくことを大いに期待します。

最後になりましたが、この教育研究愛知県集会が愛知の教育のさらなる推進のため、そして何よりも目の前の子どもたちの健やかな成長のために、実り多いものとなることを祈念し、本集会開会にあたっての基調報告といたします。

# 第71次教育研究愛知県集会 分科会概要報告

## 第 1 分科会【国語教育】

### 文学その他

#### 1. 全体を通して

説明的文章と文学的文章を合わせて18本のリポートが報告された。目の前の子どもたちの実態を見つめ、何のために、どのように読む力をつけるべきか、報告されたリポートをもとに討論が展開された。

#### 2. 討論の内容

〈読む活動を通して、どのような力を身につけるのか〉では、学習のねらいを明確にした上で、子どもが課題を見つけて課題解決に取り組んだり、学習モデルを見える化し、見通しをもって学習に取り組んだりする実践が報告された。

討論では、根拠を明確にして考える力、主題を捉えて読む力を身につけていくことや語彙を豊かにしていくことの重要性について話し合われた。

〈選択した教材にはどのような価値があるのか〉では、古典に対して、自分たちの生活と結びつきが弱いために、何が書いてあるのか内容を理解できず、興味をもって学習に取り組めない子どもたちに対し、時代背景を理解するための資料や、教科書にない作品、現代の歌を活用し、子どもの興味・関心を高める実践が報告された。

討論では、教科書にない作品を活用して実践することのよさや難しさ、教材を選択する上で考慮するべきこと、子どもの興味・関心を高めるための古典以外の教材の工夫について話し合われた。

〈読む力を高める指導の工夫について〉では、学習を実生活の場での活用につなげる実践や、場面の様子や登場人物の気持ちを具体的にイメージするための実践が報告された。

討論では、考えを支える根拠を明確にするために、想像豊かに読み広げるための工夫や、登場人物の気持ちを数値で表したり、動作化させたりする際の指導上の留意点について話し合われた。

〈読む力を高める対話的な学びのあり方について〉では、子ども一人ひとりが考えをもち、考えを可視化して対話に取り組んだ実践、対話を通して考えを深めるため、指名方法や対話後のまとめ方の工夫に取り組んだ実践が報告された。

討論では、子どもの考えを深める対話にするための指導の工夫や、自分の考えを伝えることが苦手な子どもへの支援の方法について話し合われた。

助言者からは、時代背景や作品の背景など、物語のバックボーンを理解して読むことや、情景描写を手掛かりに想像豊かに読むことの意義、自分・他者・教科書だけでなく、作品を通して伝統・文化と対話して読むことの必要性、学びに向かう力を高めるためのルーブリックを活用した評価のあり方について助言を得た。

#### 3. 今後に残された課題

(1) 子どもの興味・関心を高める教材の発掘と活用
(2) 読む力や学びに向かう力を高めるための評価のあり方
(3) めざす読む力を身につけるための段階的かつ系統的な指導

### 作文その他

#### 1. 全体を通して

作文（綴り方）の教育13本と、言語の教育1本、音声表現の教育3本のリポートが報告された。

子どもたちの実態を見つめ、文字言語・音声言語のよさをいかして、どのような力を育てていくのかということについて討論が展開された。

#### 2. 討論の内容

(1) 作文（綴り方）の教育

〈何のために・何(なに)を〉

「どのような題材を取り上げるとよいか」を柱として討論が展開された。

子どもにとって身近な学校生活の共通体験や、関心の高まっている新型コロナウイルス感染症を題材として取り上げた実践が報告された。

討論では、子どもが思いや考えを豊かに表現するために、書く目的や書いて伝える相手を意識させることの重要性が確認された。

〈何を・どのように〉

「書くことの力を高める指導の工夫」などを柱として討論が展開された。

ルーブリック評価を取り入れて、単元を通して身につける力を明確にした実践や、子どもが主体的に書くために、個に応じた指導の方法を工夫した実践が報告された。

討論では、対話的な活動の工夫として、付箋を使って互いの文章を推敲する方法や、一人1台のタブレット端末を効果的に活用していくことが確認された。

助言者からは、タブレット端末の使用について、アナログとデジタルを効果的に使い分けていくことや、今後、言葉の力で子どもが自分の未来を拓いていくことが大切であるとの助言を得た。

⑵　言語の教育

俳句の作品鑑賞を通して、助詞の使い方や語順の入れ替えの効果を考えさせることで、読み手への伝わり方が変化することに気付かせた実践が報告された。

⑶　音声表現の教育

〈何のために・何(なに)を〉

身につけた言葉の力をいかして、話す事柄の順序を考え、わかりやすい説明で課題の絵を伝える実践が報告された。

討論では、子どもたちの思いに寄り添い、実態をとらえる大切さや、課題に対する話し合いの最適人数を考える必要性が話し合われた。

〈何を・どのように〉

速音読や、アイスブレイクに取り組み、思考ツールを活用した実践や、話し方と聞き方モデルを活用した実践が報告された。

討論では、音声言語の評価について、タブレット端末などのICT機器に記録し、自分自身でめあてを達成しているか振り返ることの有効性について話し合われた。

助言者からは、音声表現の教育では、文字言語を読むことを音声言語の実践とせず、音声言語の特徴をいかした実践に取り組めるとよいとの助言を得た。

## 3. 今後に残された課題

⑴　表現の指導において、どのような子どもを育てていきたいのかを明らかにした上で、表現と認識の統一をめざしていくこと

⑵　文字言語・音声言語それぞれの特徴をいかした目標と評価方法を明らかにしていくこと

# 第 2 分科会【外国語教育】

## 1. 全体を通して

「主体的に学習に取り組む態度を育む指導のあり方」「コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方」「思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方」の三つを討論の柱とし、小グループによる発表と討論が行われた。その後、各グループから出された「全体討論への投げかけ」をもとに、全体での討論と意見共有が行われた。

三つの小グループでは、主体的に考えながら表現することができる生徒の育成をめざした中学校の実践や、積極的にコミュニケーションをはかろうとする児童の育成をめざした小学校の実践などが報告された。子どもたちがお互いにかかわり合いながら、主体的に学習活動に取り組むための手だてが数多く報告され、活発な討論が行われた。

## 2. 討論の内容

⑴　主体的に学習に取り組む態度を育む

言語活動の充実や場面設定について討論が展開された。単元のゴールを示すことや児童生徒が興味を示す設定を考えることなど、参加者のこれまでの実践から多くの意見が出された。

助言者からは、魅力的な課題の設定が大切であり、身近な話題を取り上げることや他教科と連携した課題の設定などが必要であるとの助言を得た。

⑵　コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む

コミュニケーションをはかるために、自信をつけさせることが大切であると確認され、そのための手だてについて意見交換がされた。英語が相手に伝わったと実感させることや、子どもたちが話したくなる話題を設定すること、スモールステップをふむことなどがあげられた。

助言者からは、コミュニケーション能力はすぐには身につかないので、継続的な活動が必要で、スモールトークや中間交流を通して身につけさせることが大切であるとの助言を得た。

⑶　思考力・判断力・表現力を育む

表現の仕方が分からず伝えられない場合の手だてについて意見交換がされた。わからない表現があったときに活動を中断し、全体で表現の仕方を考える、ジェスチャーで伝えさせるなどの、生徒のもっている知識を活用して考えさせる手だてが挙げられた。

助言者からは、既習の言語材料を活用し、児童生徒が自分の言葉で発信することや、目的・場面・状況を考えた言語活動が大切であるとの助言を得た。

⑷　全体討論

各小グループから出された「全体討論への投げかけ」をもとに、児童生徒が意欲的に学習に取り組める手だてや、思考力・判断力・表現力の評価の仕方、即興性を育む手だてについて、それぞれの実践をもとに活発な議論がなされた。

## 3. 今後に残された課題

⑴　ICT機器の活用と対面的なコミュニケーションのバランス

⑵　他教科との連携や小学校と中学校との連携

# 第 3 分科会【社会科教育】

## 小　学　校

### 1. 全体を通して

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を解決させたり、現在や未来の社会をとらえさせるための手だてを工夫しながら、よりよい社会を創造する力を育もうとしたりする実践が報告された。

討論では、「地域素材を教材化した学習活動の工夫と育てたい力」、「よりよい社会の実現をめざし、主体的に考えるための学習活動の工夫」や「先人の働きや政治の役割を、切実感をもって追究できる学習活動の工夫と育てたい力」などについて話し合われた。

### 2. 討論の内容

⑴　国土・産業学習

工場を見学して、仕事に従事している人と出会う中で、努力や思いに迫る実践や、思考ツールを用いて、考えを整理したり、比較したりしながら話し合う実践などが報告された。討論では、社会科における子どもたちが主体的に考えることの位置づけやゲストティーチャーを取り入れることのよさなどについて話し合われた。助言者からは、思考ツールは子どもたちの考えを表出させるための道具であって、目的をはっきりさせた上で使っていく必要があるとの助言を得た。

⑵　歴史・公民学習

避難所である学校の現状を知り、よりよくする方法を考えることで、社会を創造する力を育てる実践や、戦時中の地域の様子がわかる資料を活用したり、グループでの調べ学習や対話を取り入れたりしながら、切実感をもって、自分の意思を表明する力を育成する実践などが報告された。討論では、政治の役割や先人の働きを、切実感をもって追究させるには、どのような工夫があり、また切実感をもって追究させることで、どのような力を育てていきたいかについて話し合われた。助言者からは、対話の中で、考えのずれに気付かせたり、新たな発見をさせたりしながら、それを自分に落とし込ませていくことで、追究段階での学習が深まるとの助言を得た。

⑶　地域学習

消防団の訓練を体験したり話を聞いたりしながら、人々の苦労や思いに迫り、地域への愛着を育み、社会参画する児童の育成をめざした実践や、南海トラフ地震を教材化し、よりよい社会づくりへの参画をめざした実践などが報告された。討論では、地域素材を教材化した学習活動にはどのような工夫があり、それを取り入れることによって、どのようなよさがあるのかについて活発に話し合われた。地域素材を扱うことにより、直接体験ができたり話を聞いたりすることができ、その中で、共感が生まれ、それにかかわる課題について、切実感をもたせられることが確認された。助言者からは、社会科は感動と発見が大切であり、身近な素材をていねいに教材化することで、子どもたちは、自分たちで何とかしなければならないという切実感をもつとの助言を得た。

### 3. 今後に残された課題

⑴　子どもたちに共感や切実感をもたせるための教材の工夫

⑵　子どもたちが主体的に考えるための学習活動の工夫

## 中　学　校

### 1. 全体を通して

県内から19本のリポートが報告され、質疑や討論が活発に展開された。

地域ごとに異なるよさや課題をいかし、子どもたちに自分事として考えさせる実践や、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、ゲストティーチャーやICT機器、思考ツールなどを活用しながら学びを深める実践が多く報告された。

### 2. 討論の内容

⑴　子どもたちが主体的に取り組む学習活動のあり方

子どもが主権者として学ぶ意欲を高めるためには、課題設定の場面で、子どもの知識や経験から教材の出会わせ方を考えることの大切さについて議論された。わたくしたちにとってあたり前のことでも、実は人によってとらえ方が違い多様な考え方につなげていけるなどという意見が出された。

また、社会参画の意欲を高める学習活動として、未来予測をしながら、自分の生活と結びつけて考えていくことや、多くの資料やゲストティーチャーなど、その道のプロの考え方を参考にしながら、自分なりの考えをもって社会参画できるようにしていくことが大切であると確認された。

⑵　社会に対する見方・考え方を深める学習活動のあり方

「地域素材から社会に対する見方をどう育てるか」についての討論では、子どもたちにとって身近な地域素材をどのように社会全体の問題としてつなげていくかということが話し合われた。地域素材のもつ、子どもたちにとって身近という強みをいかすこと。同時に自分たちの地域の課題に向き合わせることで、切実感をもって課題に向き合うことが大切であるということも話し合われた。

また、「対話的な学習活動を通して、社会に対する見方・考え方をどのように深めるか」についての討論では、多面的・多角的な視点をもたせることが議論された。思考ツールを用いて子どもたちがもつ考えの違いを視覚的に交流させることが効果的なのではないかという意見も出された。

本年度は短縮日程で行われたことにより、総括討論は行わなかった。しかし、それまでの参加者による質疑や討論の中

で、「よりよい社会を創造するために社会科学習はどうあるべきか」について多く議論される場面があった。

助言者からは、子どもの主体性を担保するために、身近な魅力ある教材と対話的な活動を結びつけて単元を貫く課題を設定し、子どもたちの社会参画意欲を高めていくことの重要性が指摘された。また、授業をすすめていく中でも子どもの思考の変化に注意し、めざす子どもの姿により近づけるよう、授業を修正していくことも話題になった。

### 3. 今後に残された課題

(1) 各地域の特徴や実情をふまえた上で、めざす子ども像とそれに迫る単元をどのように設定するか

(2) 先がわからない時代に、子どもたちが未来を創造することができる社会科学習のあり方

## 第 4 分科会【数学教育】

### 算　　数

### 1. 全体を通して

「主体的な学び」「対話的な学び」「思考力・判断力・表現力の育成」の三つの柱立てで、実践の報告が行われた。

子どもたちが主体的にかかわり合う姿をめざした実践、わかる喜び・できる楽しさを実感させるための手だてを工夫した実践、筋道を立てて考え、表現できるように工夫した実践などが報告された。どの報告も子どもを中心にすえ、子どもの力を伸ばしたいというねらいを感じることができるものであった。

### 2. 討論の内容

(1) 主体的な学び

身近な地域素材を教材化することで、自ら問題意識をもち、ねばり強く追究することができる子どもの育成をめざした実践や、「わかる」「できる」という学習への充実感を体感させることで子どもの学習意欲を高める実践、単元内自由進度学習を取り入れることで、主体的に課題解決できる子どもの育成をめざした実践などが報告された。

討論では、子どもたちが主体的に学習に取り組むことができるようにするための振り返りのさせ方についてなどが話し合われた。

助言者からは、子どもたちに振り返りをさせる際に具体的な視点をもたせることや、ICT機器を活用して子どもたちが振り返った学習内容を蓄積させていくことが大切であるなどの助言を得た。

(2) 対話的な学び

タブレット端末を活用することで、自分の考えを意欲的に発表することができる子どもの育成をめざした実践や、「わからない」と素直に言える場を設定し、子どもどうしで教え合う状況をつくることで、互いに理解を深め合う子どもの育成をめざした実践、身近なものを教材にし、他教科での学びがいかせるような授業展開を工夫することで、よりよい考えを追究する児童をめざした実践などが報告された。

討論では、よりよい学びにつながる対話のさせ方について話し合われた。

助言者からは、算数において、かいた内容や操作活動が話し合いのきっかけとなり得ることや、子ども一人ひとりの課題をクラスの共有の課題にしていくことが大切であるなどの助言を得た。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成

きまりを共有し合うことを通して、数学的な見方を働かせることができる子どもを育成することをめざした実践や、プログラミングの体験を通して、順序よく考えることができる子どもを育成する実践、データの活用領域の授業を通して、子どもの批判的思考を育成することをめざした実践などが報告された。

討論では、子どもたちの思考力・判断力・表現力を育成していくためには、どのような手だてを講じていく必要があるのかについて話し合われた。

助言者からは、低学年から継続して規則を見つけさせるような授業づくりをしていくことや、日常の生活と算数で学習した内容を関連付けていくことが大切であるなどの助言を得た。

### 3. 今後に残された課題

(1) タブレット端末の特性をいかした算数の授業づくり

(2) 算数授業で学んだことと日常生活を関連付けた授業づくりの工夫

### 数　　学

### 1. 全体を通して

「主体的な学び」「思考力・判断力・表現力の育成」「学び合う力の育成」の三つの柱立てで、実践の報告や討論が行われた。数学的活動を通して、子どもの自主性を引き出した実践をはじめ、自分の考えを深めることや表現する力を高めることをねらいとした実践、グループ学習やペア学習などの学習形態を工夫した実践など、多岐にわたる実践が報告された。

### 2. 討論の内容

(1) 主体的な学び

協働学習支援ソフトを用いて考え方を共有することで、対話の質を向上させた実践や、具体物を用いて実験的に考察し、

ICT機器を活用してより発展的に検証した空間図形の実践、既習事項との相違点について考え、新たな課題意識をもたせた実践などが報告された。

討論では、話し合い活動を行う際のルール設定や、子どもが作成した問題を次時以降でどう扱うかなどについて意見交換され、「数学を苦手としている子どもが主体的に参加するための手だて」について議論された。

助言者からは、子ども自身の言葉で学習した内容を練り上げていくことが大切であること、ICT機器ありきで授業を考えるのではなく、その強みをいかしながら数学本来の楽しさを実感できるよう模索することが重要であるとの助言を得た。

⑵　思考力・判断力・表現力の育成

データをもとに推論する活動を通して、資料を活用する力を高める実践や、図形の性質をカードにまとめ、それらを選択しながら図形の性質を証明する活動に取り組んだ実践、携帯会社を選択する課題を設定し、箱ひげ図の情報をもとに考えを表現し合う実践などが報告された。

討論では、「思考力・判断力・表現力を高めるための対話の方法」について話し合われた。多様な意見を認め合うことの大切さや、すべての子どもが対話に参加する方法について意見交換された。

助言者からは、単に効率よく正答を求めるだけでなく、試行錯誤する過程にこそ本来の学びがあり、対話をしながら考えることで、学びがより深まっていくとの助言を得た。

⑶　学び合う力の育成

解く手順を先に提示しないことで、周囲と情報を交換しようとする態度を育てた作図の実践や、個人で追究した内容をワークシートに蓄積し、交流の場を通して洗練させていく確率の実践などが報告された。

討論では、学び合いでの個々の活動をどのように評価するか、振り返った内容をどのように次の授業にいかすのかについて意見交換され、「教え合いと学び合いの違い」をテーマに話し合われた。

助言者からは、教員が話し過ぎてしまう授業を見直し、子どもに「考える喜び」を実感させることが重要である、見守りや寄り添いと監視は表裏一体であり、生徒のテリトリーを守りつつ、困っている生徒の支援を行うべきであるとの助言を得た。

## 3. 今後に残された課題

⑴　主体的な対話を引き出すための指導法及び教材の蓄積
⑵　意見を共有・交流させる工夫
⑶　ICT機器の強みを適切に取り入れた授業展開の追究

# 第 5 分科会【理科教育】

## 物理・化学

## 1. 全体を通して

子どもたちが自然の事物・現象を身近に感じたり、問題解決能力を向上させるために、実物を教材に取り入れた学習問題を設定したり、プログラミング的思考を彼らに意識させたり、子どもたちから主体的に学びと向き合える場面が与えられるよう配慮したりする実践など、小学校理科5本、中学校物理10本・化学8本の23本のリポートが報告された。

討論では柱に設定された四観点のうち、特に「自然の事物・現象を、量的・関係的な視点や質的・実体的な視点でとらえさせる指導方法」と、「子どもの理科的な資質・能力の把握や育成に役立てる評価の利用」に重点が置かれた意見交換や情報交換が活発に展開された。

## 2. 討論の内容

⑴　自然事象を、量的・関係的な視点や質的・実体的な視点でとらえさせる指導方法

小学校理科のリポートでは、示温インクを水に混ぜて対流現象や温まり方を視覚的にわかりやすくした加熱実験をする実践が報告された。また、中学校化学のリポートでは、ブラックボックスとして導入した化学電池が回路負荷に与える電流や電圧の関係を「見える化」して極板の金属どうしのつながりを考えさせる実践が報告された。討論では、子どもに粒子イメージを育むのに有効な指導方法に関してリポートの実践例を取り上げながら、質疑や意見交換、教材紹介が行われた。また、学びの視点を定めて教材利用を工夫することや、ICT機器活用により事象間の比較や関係づけがしやすい環境を整えて子どもたちの気付きや思考を交流させることが、理科学習の核となる問題解決を効果的に促進させると再確認された。

⑵　子どもの理科的な資質・能力の把握や育成に役立てる評価の利用

中学校物理のリポートでは、たこ足配線を題材にICT機器を活用し、電力や熱量、電力量について子どもたちが互いの考えを明確にする実践が報告された。中学校化学のリポートでは、化学電池の性質に関する課題に対して子どもたちが実験計画を立てながら追究していく実践が報告された。

討論では、評価において子どもたちの考えの変容を追う重要性が話し合われた。理科的な資質・能力の把握や育成に役立てるため、これらを目に見える形で残す手段として従来のワークシート等の記述のみならず、ICT機器を活用して、文章、図や絵、写真や映像等を含めた保存データによっても評価が可能になることなども確認された。

⑶　総括討論

子どもたちが主体的に学びに向き合い、科学的に探究するためには、まずは教材の工夫が必要であると指摘された。子どもに身近な事象を教材にすえて学習と関連付けることにより、彼らの興味・関心は高まり、獲得済みの見方・考え方や知識を用いて学習課題や実験活動を主体的に取り組み、解決へむけて探究していくことができると確認された。また、知識を先

行して獲得させた上で活用的に教材へ出会わせるなど、教材との出会わせ方の異なる手法についても議論がなされ、教員が授業目標を十分に検討することの重要性が確認された。

助言者からは、学びの主体は子どもであることを念頭に、彼らが既知を起点にわかるまで学びたいと思える教材に出会わせるほか、ICT機器活用能力やプログラム的思考も育てつつ、子どもたちが論理的に納得をしながら問題追求が行える環境をつくるようにとの助言を受けた。

### 3. 今後に残された課題

⑴ 限られた授業時間数の中での理科的な資質・能力の育成のための工夫
⑵ 子どもの発達段階を考慮した系統的な教育課程の編成

## 生物・地学

### 1. 全体を通して

メダカや運動場の雨水といった実物を用いた実践や、校区の川や地層などの地域素材をいかした実践が報告された。また、ICT機器を活用し、身近な自然と絡めて活用していく実践も報告された。

討論では、生物教材においては「身近な自然や、生命の大切さを取り入れた単元構想の充実」について、地学教材においては「地学的な事物・現象を、時間的・空間的な視点でとらえ、比較したり関係づけたりするなど、科学的に探究する方法を用いて、多面的に考えさせる指導方法」に重点が置かれた討論が展開され、活発な意見交換が行われた。

### 2. 討論の内容

⑴ 身近な自然や、生命の大切さを取り入れた単元構想の充実

生物教材では、身近な自然にふれあわせることで、新たな課題を見つけることができ、その課題が主体性につながって授業が展開されていくことが確認された。また、川や山が近くになく、身近な自然を子どもに感じさせづらい場合は、タブレット端末を通して画像を提示したり検索させたりして感じさせていけることなどが話し合われた。さらに、メダカやモンシロチョウなどを実物として活用することで、生命の大切さを実感させ、「特別の教科　道徳」などと教科を横断的に構成していくというアイデアも出された。

⑵ 地学的な事物・現象を、時間的・空間的な視点でとらえ、比較したり関係づけたりするなど、科学的に探究する方法を用いて、多面的に考えさせる指導方法

地学教材では、対象とする物が大きいため、インターネットでのマップや、映像などで川の上流から下流まで見せていくことや、可能であれば実際に川まで見学に行き、空間的に体感させるという実践例が紹介された。また、雨が降った後の川の画像を見せたり、豪雨のあった地域に触れたりすることで、防災意識にもつなげていけるという考えも出された。さらに、各地域の特色をいかし、川や海、地層を学習に活用していくことの重要性についても話し合われた。

⑶ 助言者から

「ICT機器を用いることで、多様で大量の情報や、音声・画像を得ることができ、資質・能力の形成につながる」ことや、「①本当に力がついたか、②日常生活につながっているか、③直接体験の大切さ、以上の三つを今後、教員が大切にしていく必要がある」などの、探究が重要であるとの助言を得た。

### 3. 今後に残された課題

⑴ 子どもが自然認識を有意味に発展させる理科学習の開発・編成のあり方
⑵ 子どもの理科的な資質・能力を育成するための理科指導のあり方
⑶ 身近な自然や生命の大切さを取り入れた単元構想の充実
⑷ 自然の事物・事象を、多様性・共通性の視点や時間的・空間的な視点でとらえ、比較したり関係づけたりするなど、科学的に探究する方法を用いて、多面的に考えさせる指導方法

# 第 6 分科会【生活科教育】

### 1. 全体を通して

一年生、二年生に発表順を分け、発達段階に応じた子どもたちの様子や支援の仕方がわかりやすい会となるようにした。栽培活動・探検活動・飼育活動・おもちゃづくりや昔遊びなど、多岐にわたる報告が行われた。「かかわり」が重視される生活科において、コロナ禍での実践はさまざまな制約の中で行われていたが、どの実践も子どもたちの願いや思いをもとに、指導者が試行錯誤を繰り返しながら、今できることの中でめざす子どもに迫る手だてが数多く報告された。また子どもたちに興味をもたせる仕掛けや思考を深めるアイデアが多数出された。討論では、日頃の悩みや困りごとに、たくさんの共感や対策案が出され、活発で有意義な時間となった。

### 2. 討論の内容

⑴ 栽培活動を通して

子どもたちがいきいきと活動する様子が多数報告された。単元を通して意欲を継続させる支援や、間引きや収穫での子どもたちの葛藤、話し合いをする中で揺れ動く心の様子がうかがえた。自分の育てた野菜や植物に愛着をもち、成長を喜ぶ気持ちの先に、情意的な側面での気付きも多く得られることが明らかになった。

⑵　秋遊びや昔遊びの活動を通して

子どもたちが何度も失敗や試行を繰り返しながら、気付きを高めていく実践が数多く報告され、自由にいつでも取り組める環境の整備や、材質や大きさの違うものを準備するといった教材の工夫が重要であることが確認された。友だちとかかわることで、さらに意欲を高め、よりよいものにしていこうとする子どもたちの姿が明らかになった。

⑶　町探検の活動を通して

地域の人の仕事や様子を知り、友だちと伝え合うことで、子どもたち自身の成長にも気付いていく実践が報告された。地域の方々との交流により、さらに地域への愛着が深まる様子も明らかになり、町探検を通し、地域への愛着を深めていくとともに、自分自身の成長にも気付いていく子どもたちの姿が確認できた。

⑷　総括討論

総括討論では、他者とのかかわりについて、コロナ禍でもできるかかわり方について話し合いがなされた。タブレット端末を用いた子どもたちどうしの交流の仕方について多くの意見が出され、有意義な討論となった。また、話し合い活動の充実や板書の工夫によって、なかなか意見がもてない子たちでも表現できる方法についても多くの意見が出された。助言者からはICT機器の活用は、これからの時代必ず必要なことではあるが、やはり生活科は体験重視、二次元との違いはきちんと考慮し、人と存分にかかわらせたいとの助言を得た。豊かな体験があるからこそ、書ける・表現できるので、やり方だけではなく、豊かな体験活動によって、生活科が好きな子を育てていくことの大切さを確認した。

## 3. 今後に残された課題

⑴　コロナ禍で制限されている対話や実体験の不足をどのように補っていくかの工夫

⑵　指導と評価が一体となるような実践と評価のあり方

# 第 7 分科会【美術教育】

## 1. 全体を通して

「美術教育を通して子どもたちに伝えたいこと～子どもたちのゆたかな学びのために～」をテーマに実践報告や討論がすすめられた。

総括討論では、図工・美術教育から何を学ばせるのかという議論を通して、本年度のテーマについて考え、深めることができた。タブレット端末やPCを用いて観賞会を行ったり、描画アプリでデザインを考えたりと、ICT機器を活用した実践が多く報告された。また、図工や美術の授業に対して子どもが抱える不安や悩み、思いを受け止め、教員がどのように支援していくとよいのかという議論を通して、わたくしたち美術教員が常日頃考えなければならない課題を確認することができた。

## 2. 討論の内容

⑴　子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫

自らの思いをもって主体的に取り組ませるために、タブレット端末の描画アプリを用いてオリジナルのアイコンをデザインする実践や、ペーパーフラワーのデザインや制作、エッセンシャルワーカーへのプレゼントを通して、社会に貢献することへの意義を実感できる実践などが報告された。

討論では、「子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫」というテーマに沿った討論が行われた。市販の制作キットでも、他者とのかかわりや豊富な材料の中で制作に取り組むことで、それぞれの個性を発揮した作品をつくり出せるようになることが確認された。また、ICT機器を制作や鑑賞の場で活用する際、どのような手だてを用意して指導をしていくとよいのか。また、情報モラルの大切さなどもあわせて指導するときの留意点について話し合われた。

⑵　コミュニケーション活動を通して、発想や表現を広げる実践

廊下の天井や窓ガラスなど、校内のさまざまな場所に全学年の作品を展示し、鑑賞を通して作品への思いやお互いのよさを認め合う実践や、絵本の読み聞かせを導入に、ウェビングの活用や、ペアやグループなどでの交流を通して豊かな発想で世界に一つだけの帽子をつくる実践などが報告された。討論では、相互鑑賞や交流タイムを行い友だちとかかわることで、一人では思いつかなかった発想や表現と出会い、互いに感化しあって表現の幅が広がることが確認された。また、立体作品をつくる際、平面でのアイデアスケッチから立体にするときの手だてについて話し合われた。

助言者からは、手を使う技術や技能は大切であると同時に、ICT機器の活用も今後は必要になってくること、それぞれの題材を通して何を大切にしたいのかなど、教員の視点をぶれずにもつこと、条件を絞ったりスモールステップで取り組ませたりすることでねらった力を身につけさせられること、強度や安全性、展示方法などにも工夫を凝らし、思い出になる作品づくりが大切であることについて助言を得た。

## 3. 今後に残された課題

⑴　限られた授業時間数の中での基本的な造形技能の定着と、発想や表現を広げる工夫

⑵　ICT機器やインターネットを活用した情報収集や活用方法の工夫

# 第 8 分科会【音楽教育】

## 1. 全体を通して

コロナ禍で歌うことやリコーダーを演奏することが制限された中で、仲間と主体的・対話的にかかわり合いながら表現の工夫をする実践やタブレット端末等のICT機器を活用した音楽づくりの実践が多く報告された。工夫を凝らした手だてによって、子どもたちどうしがかかわり合い、変容していく様子がよくわかるものであった。子どもたちの実態をふまえ、めざす子ども像を明確にし、わかる楽しさ、できる喜びなどの経験を積み重ねていけるよう、さまざまな工夫をしていくことが大切であると確認された。

討論では、「基礎・基本の定着をはかり、子どもの学びを深めるための協働的な学習のあり方」「コロナ禍における音楽教育のあり方」をテーマに話し合われた。各発達段階に応じて子どもたちに身につけさせたい力や、そのための手だてを工夫することの重要性が話し合われた。また、クラッピングなどリズムを用いた授業やタブレット端末等を使用した創作の授業などについて報告された。

## 2. 討論の内容

(1) 歌唱指導

作曲者の思いや意図を歌詞や楽譜から考えたり、身体表現を取り入れたりすることで表現の工夫につなげる実践や、付箋を使ってグループで意見共有を行うなどの活動を通して、主体的に表現の工夫をする実践が報告された。また、グループ活動を活発化するためには、まずは一人で考える時間を設けた後、少人数グループで話し合うようにするなど、子どもたち一人ひとりが自分のこととして考えられるような手だての重要性が確認された。さらに、コロナ禍で歌う時間が十分に取れない中ではあるが、歌詞や楽譜を深く読み、背景を知ることで表現も深くなるという助言を得た。

(2) 鑑賞指導

地元のお囃子を通して、地域と音楽の要素をつなげてグループで話し合いをすすめるなど、郷土芸能に愛着をもたせる実践や音楽づくりと関連づけた鑑賞の実践が報告された。音楽を形づくっている要素の働きによる曲の特徴に気付かせるためには、聴くポイントを焦点化し、具体的に生徒に提示することの重要性が確認された。また、要素に着目させるためには、簡単な曲で音の高さ、速度、リズムの変化などの違いを聴かせることを継続して行うことで、理解を深めることができるとの助言を得た。

(3) リズム・創作活動・演奏活動

イメージする言語をリズムに置き換え、音楽づくりにつなげる実践や、作譜アプリを利用して校歌の創作に取り組む実践などが報告された。段階的な学びや子どもどうしがかかわり合うことで学びを深める場を教員が仕組むことの重要性が確認された。また、タブレット端末等の活用は、創作したものをすぐに音として聴くことができるというよさがあり、試行錯誤しながら創作する上で有効であると確認された。

## 3. 今後に残された課題

(1) 他教科・領域、地域の特色と関連させた音楽教育のあり方

(2) 音楽教育におけるICT機器等の効率的な活用方法

# 第 9 分科会【技術教育】

## 1. 全体を通して

「材料と加工（2本）」「生物育成（3本）」「エネルギー変換（5本）」「情報（1本）」「その他（2本）」にかかわる実践を技術教育の新しい学力観をもとに「技術の見方・考え方」「よりよい生活、持続可能な社会の構築」「技術の最適化への追求」の三本の柱立てで報告が行われた。

総括討論では、新しく必修内容となった「双方向性のあるコンテンツのプログラミング」の授業をゆたかな学びにするためについて討論が行われた。

## 2. 討論の内容

(1) 技術の見方・考え方

「社会からの要求」「安全性」「経済性」「環境への負荷」の4側面を意識した実践が報告された。

討論では、着目させたい事象を絞ることで生徒が問題を見つけやすくなることや、使用する部品を4側面から調べる活動を行うことで、子どもが自ら疑問をもち、問題を解決しようとする姿が確認された。

(2) よりよい生活、持続可能な社会の構築

収集した情報やワークシートに記述した自分の考えをペアやグループで共有する実践が報告された。

討論では、電気自動車のモデル製作の実践において、自分が住む町の問題を解決することをめざしたことで、町の特徴や解決策を問い直し続ける姿が確認された。

(3) 技術の最適化への追求

問題解決的な学習にかかわる授業実践が報告された。

討論では、製作で使用する電池や歯車の数を点数化するなど評価基準を明示することや、自分で設定した課題に対する考えや解決策をダイアモンドランキングなどの思考ツールやレーダーチャートなどを用いて視覚化することで、子どもの活動や思考が深まることが確認された。また、トレードオフの考え方を用いて複数の観点から自分たちの問題をとらえ直すこと

で、優先順位を考え、その理由を吟味する子どもの姿が確認された。

⑷　総括討論

「双方向性のあるコンテンツのプログラミング」の授業をゆたかな学びにするためについて討論を行った。制作するコンテンツを他者が見やすく使いやすい「ユニバーサルデザイン」になっているかという開発者の視点で評価を行う必要性を感じるという意見が出された。また、ネットワークを利用していくためコーディングだけでなく情報モラルにかかわる学習もあわせて行うことが必要であるという意見が出された。

討論全体を通して助言者からは、実践のデータを細かく取り、成果の検証を行うことがよりよい実践につながるとの助言を得た。そのためには単元構想の検討を行っていくとよいとの助言を得た。

Society5.0にむけた技術教育を行うためには、農耕や工業などものづくりによる達成感やそれに伴う労働など技術教育の原点について改めて確認することが重要であるとの助言を得た。

### 3. 今後に残された課題

⑴　技術の見方・考え方を明確にした授業づくり

⑵　技術を最適化し、持続可能な社会を構築していくために生徒自ら問題を見出し、課題の設定ができる授業の展開

⑶　生徒が自分の成果を実感できるような評価のあり方

## 第10分科会【家庭科教育】

### 1. 全体を通して

子どもたちが自ら課題を解決するために、教材との出会わせ方を工夫し、実践的・体験的に学ぶ場や話し合い活動を取り入れた実践が報告された。話し合い活動を行う中で、考えが深まり、幅広い視点をもてるようになることが確認された。

総括討論では、持続可能な社会の実現をめざし、将来にわたり生活を工夫したり創造しようとしたりする実践的な態度を養うための工夫を考えることができた。社会全体でも、大量生産・大量消費の行動が見直され、持続可能な社会の実現にむけての取り組みが増えてきている。その中で子どもたちが主体的に行動できるように意見交流が行われた。

### 2. 討論の内容

⑴　消費生活と衣生活

消費行動と環境のかかわりについて意識できるように、SDGsの目標について学んだり、商品選択のプロセスの中で話し合い活動を取り入れたりする実践が報告された。意見を共有する中で考えが深まり、学習開始時より多くの視点で商品選択ができるようになることが確認された。

⑵　衣生活

衣生活では、ファストファッションや着なくなった衣服の管理に関する実践が報告された。映像資料を活用して子どもたちに今の社会の様子を伝える方法が確認できた。また、学習内容をまとめさせることで、より自分の生活と結びつけながら考えられることが確認された。

⑶　住生活

住生活では、ゲストティーチャーを招きプロの技術を学ぶ実践が報告された。討論では、他領域とのかかわりや各学校の取り組みについて意見交換された。助言者からは、教材の種類や方法、生徒に示すタイミングの重要性について助言を受けた。また、高齢者体験や災害対策に関する実践では、内容が家庭にも大きくかかわることなので、家庭を巻き込みながら学習をすすめていくよさが確認された。住生活の分野は安全や防災の内容に偏りがちになるので、その他の取り組みについて意見交換された。

⑷　食生活

模型や見本教材を用いて基礎的な知識・技能を身につけさせる実践が報告された。繰り返し練習させることで子どもの自信につながり、家庭での実践機会も増えるということが確認された。また、グループごとに課題を決め、献立を考える実践が報告された。目的や食べる対象者をはっきりさせることで、より具体的に考えを深められることが確認できた。

助言者からは、各実践に関するポイントや、映像教材についての助言を受けた。また、日常生活の出来事の中から子ども自身が学びを深めていくきっかけを与えていく大切さが確認された。

### 3. 今後に残された課題

⑴　学習内容を、限られた時間数の中で効率的に伝え、考えさせること

⑵　持続可能な社会の実現にむけて、社会問題を考える視点をもたせること

⑶　小・中・高の学習のつながりや他教科・他領域との連携

## 第11分科会【保健体育】

### 体　　育

### 1. 全体を通して

「体育でどのような子どもを育てるか、自ら考え行動する子どもをどう育てるか」を大テーマに、次の二点を研究主題と

して、発表・討論が行われた。

⑴　わかる・できる・かかわることを大切にした授業づくり

⑵　ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した授業づくり

どのリポートも、技能習得をめざした取り組みやかかわり合いの方法、主体的に体育学習に取り組むためのさまざまな工夫のある実践の報告があった。

討論では、かかわり方の有効な手だてや、子どもたちが課題に向き合うためにどのような場をつくるべきか、教員のかかわり方などについて活発な意見交換がなされた。また、主体的な学びにつなげるための指導法などについて、活発な意見が出された。

## 2. 討論の内容

⑴　わかる・できる・かかわることを大切にした授業づくり

わかる・できる・かかわることを大切にした授業づくりについては、「動きやゲームをたくさん行うことで自分の課題と向き合う機会を増やす」「動いた中で出てきた困り感を大切にする」など、授業づくりの考え方について意見が出された。

討論では、教員がどのように種目の特性をとらえ、子どもたちにどのように触れさせるかで課題のもち方も変わってくるとの意見が出された。各種目のもつ面白さに触れることで、「できるようになりたい」と課題をもつ重要性が確認された。また、課題に気付けなかった子どもに対して、ICT機器の活用や学習カードなどを用いて教員がかかわることが重要であるとの意見も出された。

助言者からは、個別最適な学習と協働的な学びを、体育科としてはどのように取り組んでいくべきかを考えていくことが、今後の体育の授業を行う上で重要な視点となるとの助言を得た。子どもへのかかわり方も、子ども主導の場面と教員主導の場面をつくることで、学ぶべきものをしっかりととらえ、競技スポーツとしてではなく生涯スポーツへつながる指導をすべきであるとの助言を得た。

⑵　ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した授業づくり

ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した授業づくりについては、「子どもたちが自らやりたくなる教材の選択をする」「モチベーションを維持できる声がけや場づくりをする」ことが効果的であるという意見が出された。

討論では、できなかったことに向き合うだけではなく、できたことも「なぜできたのか」を考えることで、理解を深め、主体的な学びにつなげる機会になるという意見が出された。できるようになるために分析して考える時間と、実際に運動に取り組む時間のバランスを両立することが大切であるとの意見が出された。

助言者からは、生涯スポーツを見据え「する・見る・支える」という視点をもち、これまでの学習で主眼が置かれがちであった「する」部分の運動量だけではなく、これからは「見る・支える」部分の必要性を高め、子どもたちの活動量としてとらえ、バランスよく学びを保障するという視点をもつべきであるとの助言を得た。身をもって知る・相手の身になって考えるという体育ならではの学びを子どもたちが感じられる実践を増やしていくことが大切であるとの助言も得た。

## 3. 今後に残された課題

⑴　わかる・できる・かかわることを大切にした授業づくり

⑵　ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した授業づくり

# 保　　健

## 1. 全体を通して

「子どもが生活の主体となるための保健教育」をテーマに、さまざまな健康課題に対応するため、教材・教具を工夫した実践、子どもの主体的な活動を中心とした実践、学校内・外との連携を深めた実践などが報告された。報告を通して、健康に対する意識の高まりや、健康課題の解決に向けた実践力が着実に育っている様子を感じることができた。

## 2. 討論の内容

⑴　指導方法・指導形態の工夫

タブレット端末・PCを活用し自分の口腔や姿勢の写真を教具として一人ひとりの健康課題の解決をめざした取り組みや、視覚に訴える教材・教具を活用して心と体の両面に働きかけた新型コロナウイルス感染症予防に関する指導、生活習慣の振り返りカードや学校保健委員会での学びをいかした朝食に関する指導が報告された。

討論では、子どもが主体的に学ぶための手だてについて話し合われた。自分の課題に気付くことができるように、事前アンケート結果の活用やグループでの話し合い活動が有効であるとの意見が出された。

助言者からは、担任や家庭と連携して継続的に取り組むことが重要であることや、家庭の背景に寄り添った指導方法を検討すべきであるとの助言を得た。

⑵　心・命・性に関すること

怒りの感情を客観的にとらえることができる「きもちツイート」「心の温度計」を活用したアンガーマネジメントの実践や、スクールカウンセラーと連携してコミュニケーションスキルの向上をはかり自他のよさに気付かせた実践、教科横断的に行った命の教育が報告された。

討論では、心の評価方法について話し合われた。子どもたち一人ひとりとの会話から変容をつかむことや、担任から子どもの様子を聞くこと、実践後の感想や振り返りの活用について意見が出された。

助言者からは、他教科と関連させて多面的に指導をすすめることで深い学びにつながるとの助言を得た。

⑶　保健・総合などでの指導のすすめ方

保健委員と取り組んだ新型コロナウイルス感染症予防に関する指導、学校歯科医や家庭と連携した個別の歯科指導、危険予知トレーニングを取り入れたけがの防止の実践、家庭と連携して教科横断的に取り組んだがん教育が報告された。

討論では、実践後の意識・行動の継続について話し合われた。年度始めの職員会議での指導内容の提案や、他教科の教員との連携により継続的に取り組むこと、学校医や家庭と連携するなどの意見が出された。

助言者からは、指導計画を共有し学校全体で取り組むことの大切さ、がん教育に取り組むためには、ねらいを明確にするとともに一人ひとりの家庭の背景に留意する必要があるとの助言を得た。

⑷　生活に生きる保健教育

校内で組織的に食育や体力の向上に取り組んだ実践、保健体育科の授業や掲示物などと関連させて継続的に取り組んだ生活習慣に関する保健教育、学校全体で心と体の健康増進をはかった取り組みが報告された。

討論では、家庭との連携について話し合われた。実践内容を家庭に知らせて共有をはかる、保健だよりにアンケート欄を設けて保護者の思いを把握し寄り添いながら実践をすすめるなどの意見が出された。

助言者からは、新型コロナウイルス感染症の流行が懸念される今こそ生活習慣の指導が重要であることや、子どものことをより理解している担任が中心となり学校医や学校歯科医と連携して組織的に取り組むことが有効であるとの助言を得た。

### 3. 今後に残された課題

⑴　子どもが自ら課題を見つけ、解決の方法を見出していく力を育むための指導・支援のすすめ方

⑵　他教科とどのように関連づけ、評価をどのように行うか

## 第12分科会【自治的諸活動と生活指導】

### 小　学　校

### 1. 全体を通して

「たくましく生きる子どもを育てよう」を主題にして、活発に討論された。

子どもたちがよりよい人間関係を築くために、学級や学年、異学年交流を通して活動した実践が多く報告された。また、子どもたちが自分自身を見つめ、自ら課題を見つけて取り組むことで、達成感や満足感を味わい、豊かな人間性を身につけた実践や、学校・家庭・地域が連携して一人ひとりの子どもを支援した実践などが報告された。

これらの実践報告をもとに、子どもたちの活動のあり方や意義、子どもたちの実態のとらえ方、それらをふまえた教員の支援のあり方について熱心な討論が展開された。

### 2. 討論の内容

⑴　子どもたちの気持ちを大切にし、実態を把握した上で、よりよい人間関係を築くためにどのような活動を展開していくのか

学校生活における認め合い活動や異学年交流などを通して、温かい人間関係をつくり上げていった実践が多く報告された。

討論では、よりよい人間関係を築くためには、子どもの自己指導能力を高めることが必要であるという意見や、子どもが主体的に活動するための支援を工夫することが必要であるという意見が交換された。また、周りの子どもと実態に合った活動を行うことの重要性も確認された。

⑵　心理的な背景や発達段階をふまえ、子どもたち一人ひとりをどのように理解し、支援していくのか

振り返り活動やアンケート調査などを用いた分析を通して、子どもたちの理解を深め、ストレスマネジメントやキャリア教育を取り入れて自他の理解を深めた実践や、小1プロブレムに対する具体的な実践が報告された。

討論では、発達段階に応じた振り返り活動を継続的に取り組むことで、子どもの自己有用感や自己肯定感の高まりのつながりについて話し合われた。また、さまざまな実践を行うだけでなく、教員が毎日子どもとのかかわりを振り返ることの重要性も確認された。

⑶　どのようにして、集団の質を高めていくのか

学校行事や話し合い活動などを充実させた実践や、課題解決に取り組むことで、主体的に活動できる子どもを育てた実践が多く報告された。

討論では、よりよい集団をつくるためには、子どもたち一人ひとりの意識を変えたり、自分が学級の役に立っているという実感をもたせたりすることについて話し合われた。

総括討論では、発達段階に応じた子どもへの働きかけについて活発な討論が展開された。子どもが実践を振り返る活動では、自分を振り返る活動だけでなく、互いに認め合う活動を取り入れることで、さらに自己有用感や自己肯定感が高まるのではないかという意見が出された。子どもを理解し、支援していくためには、子どもの話に耳を傾けたり、多くの視点から見たりすることが重要であると確認された。

助言者からは、生活指導とは「交わり」の指導であること、そのためには他者との違いを前提に共同関係をつくり出していくことの必要性について助言を得た。

### 3. 今後に残された課題

⑴　子どもをしっかりと見つめ、実態を正しく把握した上での活動のあり方

⑵　子どもたち一人ひとりの理解と教員の支援のあり方

⑶　集団の質を高めるための活動のあり方

## 中　学　校

### 1. 全体を通して

「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに、活発に討論された。

子どものやる気を引き出すために自己存在感を大切にした実践や、学級会活動などを通して個と集団の力を高める実践、家庭・地域と連携した活動を通して子どもの成長をめざした実践が報告された。

これらの実践報告をもとに、子どもたちの実態をふまえた支援のあり方について議論が深められた。

### 2. 討論の内容

⑴　子どもの気持ちを大切にし、実態を正しく把握した上でやる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方

討論では、協力的・参加的、体験的な活動を学校生活の中に組み込み、その中で互いのよさを認め合う場を設けることの大切さや、PDCAサイクルを学級会活動に組み込み、その中で振り返りを共有して、次のステップに自分の意見が反映される経験を積む中で、子どもの自己存在感を味わわせることの大切さなどについての討論が行われた。

⑵　集団の質を高めるための支援のあり方

討論では、生徒会活動や学級会活動の中で問題を共有した上で、その解決にむけて話し合い、決めたことを実践する取り組みを続けていくことにより、問題に主体的に向き合い、力を合わせて解決しようとする生徒を育成していくことの有用性などについて話し合われた。

⑶　問題行動の解決や予防のための家庭・地域との連携、コミュニケーション能力の育成とその支援のあり方

討論では、地域や家庭と連携しながら、地域の中で子どもを育てていくことの大切さについての話し合いが行われた。

総括討論では、「たくましく生きる子ども」を育てるために必要な手だてのあり方について話し合われた。

その中でも、いかに子どもたちに自信をもたせるかについて討論が行われた。そして、教員が子どもに対して寄り添って背中を押す声かけを行っていくことの大切さや、よさをいかすことができる場を設定することの大切さなどが確認された。また、子どもどうしで感謝の気持ちや気付きなどを共有することにより自己有用感を高めていくことの有効性が確認された。さらに、PDCAサイクルの中で、問題を見つけ、解決する方法を自分たちで決め、決まったことを実践する場を多く設けることで、子どもの自主性を高めることの大切さについて確認された。

助言者からは、他者とのかかわりの中で個性を明らかにし、他者から承認される経験が、子どものやる気を引き出すことにつながるとの助言を得た。さらに、より多くの子どもが問題を自分のこととしてとらえられるようにするためには、継続的に取り組みをすすめることが大切であるとの助言を得た。

### 3. 今後に残された課題

⑴　子どもの気持ちを大切にし、実態を正しく把握した上でやる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方

⑵　集団の質を高めるための支援のあり方

⑶　問題行動の解決や予防のための家庭・地域との連携、コミュニケーション能力の育成とその支援のあり方

# 第13分科会【能力・発達・学習と評価】

### 1. 全体を通して

今年度からICT機器（タブレット端末）を導入している学校が多く、それらを活用し、児童生徒が主体的・対話的で深い学びにむけて授業参加できるような手だての工夫、思考ツールやICT機器を活用した表現活動の工夫の実践などが報告された。

また、対話によるアクティブラーニングを主とした授業展開についての実践や各教科の特質をいかした指導内容の工夫についての実践などが報告された。さらに、小学校一年生活科「あきはかせになろう」の秋見つけの実践を通して、自然や季節変化の面白さや不思議さに気付き、自然や人とのかかわりから学びを深める子の育成、他者を意識して行動することで、よりよい学級や人間関係をつくろうとする児童の育成などの実践が報告された。

### 2. 討論の内容

⑴　子どもたちにとって深い学びになる授業の工夫とは

討論では、深い学びの実現のために、主体的・対話的な学びは不可欠だという意見が出された。子どもたちがタブレット端末の画面を共有し、意見交流をする時間を設けることで、より意欲的に学び、積極的に話し合ったり、友だちの意見を取り入れ自分の意見を見直し再構築したりすることにつながるという意見が出された。

一方で、タブレット端末を活用することで、教員の教材研究の時間が増えたという意見が出された。タブレット端末を活用した授業展開ではなく、授業の手だての一つとしてタブレット端末を活用すべきであり、授業をよりよくするための道具として使っていくことがよいという意見も出された。

助言者からは、タブレット端末について、新しいものであるため、教員自身が試していくこと、はじめは時間がかかるものの、教材研究していく中で、授業の道具として使っていくことが大切であるという助言を得た。また、深い学びを実現するためには、子どもたちが身近な疑問から課題を見つけ、調べたり発表したりすることで、新たな疑問が生まれ、子どもたちは学びを深めていくことができるという助言を得た。

⑵　子どもたちが他者とかかわることのよさとは

ここでは特に、エンカウンターをすることのよさについて話題に挙がった。子どもが他者を知ったり、自分を知ったりする機会を意図的に設けることで、学級の中で自己の存在を意識し、「集団の中の自分」を見つけることにつながるのではないかという意見が出された。

助言者からは、子どもたちが人間関係を円滑にすることで、学校生活を豊かにできることや、そのために自分の行動を見直していきたいと考えることは大切である反面、子どもたちが他者にばかり目を向けるのではなく、自分と向き合える場を設定することが大切であるという助言を得た。

### 3. 今後に残された課題

⑴ 子どもたちが主体的・対話的で深い学びに向かうための手だて、機器の有効的な活用の仕方について
⑵ 教科全般におけるよりよい評価のあり方について

## 第14分科会【特別支援教育】

### 1. 全体を通して

「豊かに生きるための力を育む」というテーマのもと、16本のリポートが報告された。

子どもの教育的ニーズを的確に把握し、学習意欲を高めるような学習活動や教材・教具の工夫をした実践、人とかかわる力やコミュニケーション能力を高めるための実践、個々の子どもの発達の状況に応じた生活単元学習や自立活動の工夫をした実践、子どもの実態についての共通理解や通常学級への移行支援に関する実践、などが報告された。

### 2. 討論の内容

⑴ 学習指導をどのようにすすめるか

教科別の学習指導では、特別支援学校における道徳科の指導方法を工夫した実践、子どもの実態や課題に応じた算数科や理科の指導内容を工夫した実践が報告された。また、教科・領域を合わせた学習指導では、生活単元学習で理科や算数科の学習内容を交えながら、コミュニケーション能力の向上をめざした実践が報告された。

討論では、子どもの特性に合わせた指導方法の工夫や、実践後の子どもの変容について意見交換された。特に「特別の教科　道徳」の指導については、特別支援学級の子どもはイメージをつくりにくかったり、共感することが難しかったりするため、授業だけに限らず、日常生活のさまざまな場面で、指導することの重要性が確認された。その他、作業を取り入れた活動については、子どもの目的意識を明確にさせたり、意欲を維持させたりするための手だてが重要であることが確認された。

⑵ 人とかかわる力を育てるための指導

教科指導を通して人とのかかわり方を学ぶ実践や、交流学級の子どもとのかかわりの場の設定をし、さまざまな側面から支援を講じた生活単元の実践が報告された。また、子どもの家庭環境や問題行動の様子から、子どもの実態に合わせて支援を講じた自立活動の実践が報告された。

討論では、他者と積極的にかかわる活動を通して、他者理解・自己理解する力や感情をコントロールする力を高めるための配慮や手だてが重要であることが確認された。また、教室外での活動や地域での活動の際の関連機関との連携や相互情報交換の必要性が確認された。

⑶ 特別支援教育をどのようにすすめるか

プログラミング教育を取り入れた生活単元学習の実践や、主体的に取り組む意欲を高める手だてを講じた自立活動の実践、学校全体で困り感のある子どもの理解や支援に取り組んだ実践などが報告された。

討論では、子どもの実態や特性を見極めて、課題を設定したり支援のためのツールを選択したりすることの重要性が確認された。また、子どもがICT機器を上手に活用することで、卒業後に必要な生活力を身につけることの必要性について意見交換された。

助言者からは、特別な支援が必要な子どもが、どのように社会に対応できるようになるか系統立てた指導を行うことが重要であるという助言を得た。また、成功や失敗などの結果に重点を置きすぎず、どう挑戦できるように支援・配慮したかが重要であるという助言が得られた。

### 3. 今後に残された課題

⑴ 合理的配慮に重点をおいた実践
⑵ ICT機器を活用するなど、生活や学習の場の移行や、将来の生活を見越した実践
⑶ 学んだことをさまざまな場面で活用する力の向上をめざした実践

## 第15分科会【進路指導】

### 1. 全体を通して

基礎的・汎用的能力を育ませる啓発的な体験活動を通して、望ましい職業観や人生観を育む進路指導の実践が報告された。総合的な学習や特別活動を中心に、各教科や学校行事など、さまざまな教育活動を通した実践であった。

また、各学年で意図的に体験的な活動を計画し、全校体制で系統的なキャリア教育の推進に取り組んだ実践が小・中両校

から報告された。コロナ禍において、職場体験学習をはじめとした地域と連携した取り組みの実施が難しくなるなか、タブレット端末などのICT機器を活用した取り組みや、昨年度より導入されたキャリアパスポートの活用など、時世の変化が感じられる実践だった。

### 2. 討論の内容

⑴ 啓発的な活動や体験に対して、子どもたちの意欲を引き出し、系統的・継続的に取り組むための手だてについて

リーダー・イン・ミーの導入やNIEの導入や、SDGsを通して社会に対する理解を深める実践など、啓発的な活動を通して行われる系統的なキャリア教育の実践とその効果が報告された。コロナ禍において新たに開始された実践や、キャリアパスポートやタブレット端末のように近年導入されたものなどについて、継続的かつ効果的に取り組むための手だてが話し合われた。また、子どもたちの発達段階を意識した系統的な指導計画と、キャリア教育における小・中連携が必要であると確認された。

⑵ 自己を見つめ、望ましい職業観や人生観を育むための学校と地域の連携について

地域の特徴をいかした啓発的な体験学習を通して、望ましい職業観や人生観を育む実践が報告された。校区の過疎化がすすむ地域からは、地域の特色や魅力について調査し発表する活動が報告され、望ましい職業観や人生観の中で、故郷や家族がどう扱われるべきなのかが話し合われた。

⑶ 組織的に計画し、実践するキャリア教育について

各教科や各学年で連携して活動を計画し、学校体制でキャリア教育の推進に取り組んだ実践が報告された。効果的なキャリア教育を行うには、組織的に取り組むための協力的な体制づくりが必要であると確認された。

### 3. 今後に残された課題

⑴ 子どもたちが主体的に進路選択できる力を育む計画的な進路指導のあり方

⑵ 小・中・高の連携や、学校以外の関係機関との連携による進路指導の手だて

⑶ 生きる力を育む組織的・系統的な進路指導の推進

## 第16分科会【教育条件整備】

### 1. 全体を通して

「子どもの学習権の保障のために」を主題に、ICT教育にかかわる教育条件整備や、子どもたちの心の居場所を保障する教育条件整備についての実践が報告された。

意欲的に学ぶことのできる学校をめざすために、ICT機器の整備や利用状況の調査結果と今後の課題が報告された。

また、子どもたちの心の居場所を保障するための人的支援や、関係機関との連携に関する実践と今後求められる条件整備について報告された。

### 2. 討論の内容

⑴ ICT教育にかかわる教育条件整備

学校における教育の情報化の現状に対する教員の意識、ICT環境・使用に関する調査結果と今後の課題が報告された。参加者からは、ICT機器を活用した実践例や使用教材について積極的に意見交換がされた。地域によって、ICT教育の現状や活用方法についてさまざまな違いがあることが確認された。

助言者からは、デジタル機器の利用について、校内LANや人的設備をすすめていくことの必要性や、デジタル機器の使用に伴って、それを使用していく子どもたちへのルールの取り決め、モラルを向上させていくことが大切であるという助言を受けた。

⑵ 子どもの心の居場所を保障する教育条件整備

コロナ禍における新しい生活様式に関する小中学生の意識調査結果や自治体における教育相談体制、学校におけるさまざまな教育相談の事例、関係諸機関と連携した取り組みの成果が報告された。参加者からは、地域における教育相談体制にはどんなものがあり、どう連携をとっているのか、校内における支援体制についての情報交換が行われた。

助言者からは、コロナ禍において、家庭内での問題が増えている現状が指摘され、学校における働きかけの成功例や失敗例を広く学校間で共有し、実績を上げていくことが大事であるとの助言を得た。

### 3. 今後に残された課題

⑴ ICT機器のさらなる充実や活用する教員の力量向上にかかわる条件整備をすすめること

⑵ すべての子どもたちが安心して学校に通うことができるような人的支援の配置拡大や、関係機関との連携強化にかかわる条件整備をすすめること

## 第17分科会【過密・過疎、へき地の教育】

### 1. 全体を通して

どの学校の報告も、身につけさせたい力を明確にしているという点、小規模校の実践である点、地域の特性をどのようにいかしていくかという点が取り上げられていた。

小規模校は、少人数のため、個別支援がしやすいという利点がある一方で、多くの人とかかわる経験が乏しく、多様な考え方にふれる機会が少ない傾向にある。また、気心の知れた仲間と過ごす時間が長いため、大人数の集団での活動になったときに不慣れな部分がみられることもある。自分の考えを明確にもち、他者と伝え合う活動を通して、自分を表現する力を高める実践が報告された。また、地域素材や人材をいかすことで、ふるさとに愛着をもつ実践が報告された。

## 2. 討論の内容

⑴ 子どもに身につけさせたい力を明確にし、大規模校・小規模校の特性を生かした教育支援のあり方

理科の授業を核として、主体的に取り組む力や友だちと比べて考える力を身につけさせることをめざした実践、タブレットや学校図書を活用しながら、友だちとかかわる中で、感性をみがき合う学びをめざした実践、オンラインで他校の児童と交流することで他者と考えを深め合うことをめざした実践が報告された。

討論では、コロナ禍で、他校の児童・生徒と直接会って交流する機会がもてない中で、オンライン学習を取り入れることについて話し合われた。小規模校では、一人ひとりが発言できる機会を多くもつことができることから、効果的であるという意見が出された。一方で、機器の扱いに不慣れであることから、指導に難しさを感じることも指摘された。

助言者からは、子どもや地域に応じて、柔軟に教育課程を編成していくことが大切であるとの助言を得た。

⑵ 過密・過疎、へき地における地域の「ひと」の思いにふれ、かかわる教育活動のあり方

地域の人の思いにふれることで、ふるさとの過去、現在、未来を自分事として語れる子をめざした実践、地域の歴史を既習事項と関連づけて考えることで、ふるさとへの愛着を高めることをめざした実践が報告された。

討論では、コロナ禍で、地域の人材をいかした活動がもちにくくなったことから、オンラインで交流する場を設けていることについて話し合われた。直接会うことができない分、熱量が伝わりにくいことや体験活動を行うことができないことなどの課題が出された。そこで、外部機関と連携をはかることで、地域とつながり、子どもにとって価値のある教育活動ができるように模索しているという意見が出された。

助言者からは、へき地・小規模校ならではの、地域との連携のしやすさをいかして、子どもに身につけさせたい力を明確にして、地域とかかわることが大切であるとの助言を得た。

## 3. 今後に残された課題

⑴ 子どもに身につけさせたい力を明確にし、大規模校・小規模校の特性をいかした教育支援のあり方

⑵ 過密・過疎、へき地における地域の「ひと」の思いにふれ、かかわる教育活動のあり方

# 第18分科会【情報化社会の教育】

## 1. 全体を通して

10本のリポートのうち、5本がプログラミング教育を含む論理的な思考を育成するものになっており、学年に応じた実践やアンプラグドの方法を用いた実践が報告された。残り5本は、情報モラルに関するものになっており、危機の活用を前提とし、適切な活用方法を児童自らが判断できる力を身につけさせる「デジタル・シティズンシップ教育」を意識した実践が報告された。

## 2. 討論の内容

⑴ プログラミング教育において、主体的に子どもたちが情報を活用し、論理的な思考力を培うためには、どのような手だてがあるか

プログラミング的思考である「分解」「抽象化」「一般化」「組み合わせ」の考え方にもとづいて問題を解決させる実践、体育のリズムダンスや国語の作文などの教科の中でプログラミング的思考をさせる実践、思考ツールを子どもに選択させて問題を解決させる実践、特別支援の子どもに生活力を高めさせるプログラミング教育の実践などが報告された。

討論では、プログラミング的思考の分岐の考えを用いるタイミングについてや、タブレットとアンプラグドとをどのように組み合わせて指導するかなどについて意見交換が行われた。

助言者からは、プログラミング教育の継続的で発展的（スパイラル）な実践によってプログラミング的思考を高次に育てることができ、そのための手だてとしてICT機器を位置づける必要があるとの助言を得た。

⑵ 子どもたちの情報モラルを育成するためには、どのような学習活動をすすめていけばよいか

情報モラルを意識させながら個別最適な学びを行う実践、インターネット接続機器の正の側面を考えさせる実践、SNS上でのトラブルを例に話し合い活動を行う実践、保護者と協力して家庭で情報モラルを意識させた行動を促す実践が報告された。子どもの情報モラルの実態の検証方法では、独自の測定表を用いてレーダーチャートに示す方法やエクセルでアンケートをつくり、点数化することによってゲーム依存度を振り返らせる方法が示された。

討論では、現実問題で起こっているSNSトラブルへの指導方法についてや、学校と家庭がどのように連携をはかるかについて意見交換が行われた。ゲーム依存については、一般的に悲観的な意見が多くある中で、ゲーミフィケーションの考え方をどのように取り入れていくのかについて話し合いが行われた。

助言者からは、情報モラルを指導するにあたり、不正行為を追及してしまうような指導やインターネットに対するマイナスイメージをもたせる指導にならないよう気をつける助言を得た。そして、コンピュータのよき担い手から社会の活用を考えるデジタル・シティズンシップ教育への転換をすすめていくことを今後の指導に求めた。

## 3. 今後に残された課題

⑴ プログラミング的思考を継続的で発展的（スパイラル）に行うための方法
⑵ 特別支援におけるICT機器の効果的な活用方法
⑶ デジタル・シティズンシップ教育への転換をどのようにすすめていくか

# 第19分科会【読書・学校図書館】

## 1. 全体を通して

読書を通して、自己の考えを広げ、他者への理解を深めようとした実践が報告された。

目的に合った本を選書したり、主体的に情報収集を行い、活用したりする活動を通して、読書に対する価値を見出すように促した実践が報告された。

さまざまな事情をもつ子どもたちが主体的に図書館にかかわりをもてるように、魅力ある図書館づくりを工夫した実践が報告された。

タブレット端末と本を併用し、子どもたちの主体的な取り組みを促す実践の報告も多くなされた。

討論では、タブレット端末と図書館の本を併用するための方法や、調べ学習やポップづくりなどの活動に消極的な子どもへの声かけの仕方、コロナ禍での図書館利用の方法など、活発な意見交換がなされた。

## 2. 討論の内容

⑴ 読書活動

読書が自分の世界を広げ、自己理解につながることを、ビブリオバトルや本を活用した授業を通して実感させた実践やタブレット端末を利用して、子どもにおすすめ本をプレゼンさせたり、感想交流を促したりした実践、優れた表現に着目したり、伝える相手を明確にしたりしてポップ作成を行った実践や、読書のよさを見出し、生涯にわたって読書に親しむ子どもの育成をめざした実践が報告された。

⑵ 情報活用

辞書引きで語彙を増やし、調べ学習に主体的に取り組む児童の育成をめざした実践や、思考ツールを用いたワークシートを活用し、情報整理を行わせた実践、リーフレットにまとめる活動を通して、本や資料から必要な事柄を要約できるようにした実践が報告された。

⑶ 図書館運営・連携

学校ホームページに学校図書館の蔵書一覧を掲載し、オンライン検索と貸出を整備した実践やさまざまな委員会活動やポップづくり、タブレット端末を活用した読書記録の作成など、「読書センター」としての機能を紹介した実践、外国人生徒が利用しやすい図書館づくりを通して、図書を介した生徒どうしのかかわりを促した実践が報告された。

⑷ 情報交換

教科等での図書館活用について、情報交換を行った。社会科や総合的な学習の時間に行う調べ学習での活用が目立った。その他にも、英語の授業への導入として、英語の絵本を紹介したり、美術の鑑賞の時間にさまざまな作家の画集を用いたりするなど、国語科以外での活用の例が意見として出された。

## 3. 今後に残された課題

⑴ 読書に親しむ活動や情報活用の授業を通して他者理解をすすめるとともに、地域や家庭と連携した図書館活動の計画
⑵ 図書館運営の年間計画作成時に学校司書と連携をはかり、教科横断的な活動を学校全体で行っていくための工夫
⑶ 発達段階や校種に適するように「読書センター」や「情報センター」としての学校図書館の機能を拡充させる工夫

# 第20分科会【総合学習】

## 1. 全体を通して

今日的な課題や身近な事象を探究課題として取り上げ、教育課程を自主編成し、他教科とかかわらせながら、主体的に探究に取り組む子どもの育成をめざした実践が多く報告された。また、コロナ禍という状況下においても、オンライン会議や授業支援ソフトを使用することで協働的な学びの実現をはかるなど、直面している昨今の状況そのものを切実な課題として新たな学びのあり方を模索する先生方の熱意に感心させられた。

## 2. 討論の内容

⑴ 課題を自分事としてとらえ、主体的に探究するための手だて

子どもたちが探究課題を自分事としてとらえるために、五感を使った体験的な活動や子どもたちにとって身近な話題を教材とした実践が多く紹介された。教員も一緒になって課題解決に取り組み、探究の過程を楽しむ必要があるという教員自身の姿勢についても意見が出された。

助言者からは、体験活動の際には、徹底した相手意識をもって継続的にかかわることや、批判的思考力をもって自分たちの意識を見つめ直すような活動とする必要があるという助言を得た。

⑵　効果的な地域との連携のあり方

地域とのかかわりを通して、地域に愛着をもち、地域をよりよくしようとする実践が報告された。討論では、教員自らが地域のよさや課題を見つけ、地域の魅力ある教材に気づける視野の広さをもつこと、単発の活動とせず、繰り返し地域とかかわり続ける場の設定の大切さについて話し合われた。

助言者からは、地域との連携によって、子どもたちが困り感をもったり、失敗を経験したりすることで、新たな探究課題の発見につながる面もあるという助言を得た。

⑶　総括討論

持続可能な学びとしていくために、探究課題を子どもの生き方につなげられるような総合学習のあり方について話し合われた。

子ども自身が課題を設定し、探究の過程を意識すること、みんなで課題を解決する楽しさを味わう協働的な学びをすすめることの重要性が確認された。そのための教員の役割として、探究課題のもつ魅力や有効な手だてについて教員間で共有し、組織的に子どもの学びを支えていくことも必要であることが確認された。

助言者からは、教員間での情報交換や引き継ぎの仕組みを整備し、実践そのものも持続可能にしていくことが必要であるという助言を得た。また、AIやICT技術の発展がすすむ未来で求められるであろう、人とのふれあいや本物の体験活動を取り入れたカリキュラムを創造し、子どもの非認知能力を育むことができる教員が今後求められていくという指摘があった。

## 3. 今後に残された課題

⑴　探究的な学びを実現する手段としてのICT機器や思考ツールなどの有効な活用のあり方

⑵　今日的な諸問題の根本的要因に迫ることで、社会変革につながるような深い学びの実現にむけた授業展開の工夫

⑶　持続可能な実践とするための教員間の連携や学校体制のあり方

# 特別分科会【特別の教科　道徳】

## 1. 全体を通して

小中合わせた11本のリポートでは、導入や発問などを工夫した実践や、国語科や体育科などの他領域と関連させた教科横断的な実践、マップやチャートを用いたり紙コップなどの教具を活用したりすることで思考の可視化を工夫した実践、自作教材を用いた実践など、さまざまな手だてをもとにした実践が報告された。また、リレーローテーション道徳や2時間完了授業といった工夫も紹介された。討論は、「小中学校の実践について、さまざまな工夫が、児童や生徒の自己の生き方、人間としての生き方を深めることにつながるものとなっているか」に重点を置いて展開され、活発な意見交換が行われた。

## 2. 討論の内容

⑴　小学校の実践について

**【実生活につなげる】**

ウェビングマップの作成や手紙を書く活動を取り入れた実践報告がされた。討論では、SST（ソーシャルスキルトレーニング）を特別活動で扱うか道徳で扱うかについて話し合われた。道徳教育という大きなくくりで考えることができるのではとの意見が出された。

助言者からは、道徳で学んだことを実生活につなげるためにSSTなどを活用するというやり方がよいのではないかとの助言を得た。

**【価値観のずれを生じさせる】**

映像資料を活用してこれまでと違う視点を与えたことで、道徳的価値の理解を深める児童の様子が報告された。多面的・多角的な思考を促すための映像資料の提示について話し合われた。

助言者からは、道徳は既存の価値観から、教材を通して自分の考えを広げるものであり、価値観のずれを意図的につくることが大事になるとの助言を得た。

**【自作教材】**

新型コロナウイルス感染症を題材とした自作教材による実践が報告され、自作教材についての意見交換がされた。

助言者からは、自分と異質の考えにふれさせるという意味で切実感をもたらす教材となっているとの評価を得た。

⑵　中学校の実践について

**【リレーローテ―ション道徳】**

リレーローテーション道徳について、教材研究や教員どうしの学び合いにおいて有効であったという実践が報告され、メリットとデメ㈪ットについて意見交換がなされた。その中で、授業を行う時期や順番についての工夫が報告された。

助言者からは、道徳の授業は、生徒理解が大事であるとの認識の上で行っていくことが必要であるとの助言を得た。

**【ICT機器の活用について】**

授業において充実した議論を行うための手だてとしてタブレット端末を活用した実践が報告され、ポジショニングなどの機能をどのように活用していくか、また、最後の振り返りにどのようにいかしていくとよいかについて意見交換がなされた。その中で、意見の変遷を可視化することにより、議論を深めたり振り返りにつなげていったりした実践が報告された。

助言者からは、迷いの中に人間の生き方が凝縮されており、その変容を見ようとする努力が大切であるとの助言を得た。

## 3. 今後に残された課題

⑴　自分の生き方につなげて考えることができるようにするための工夫

⑵　ICT機器を授業における議論や振り返りにどのようにいかしていくか